

# OPRT ニュースレター No.14

No.14  
2005年11月

〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13 (三会堂ビル9階)  
電話: 03-3568-6388 FAX: 03-3568-6389  
URL: http://www.oprt.or.jp E-mail: hitomi@oprt.or.jp

— みんなの力で おいしいマグロを いつまでも —

発行・社団法人 責任あるまぐろ漁業推進機構

## 真の構造改革でマグロ漁業は再生できる

全国遠洋沖合漁業信用基金協会 マグロ漁業の将来を  
富岡功理事長インタビュー どう見ますか？

いま、カツオやマグロは全国どこでも買うことができます。しかしこれが突然なくなったら消費者の方はどう思うのでしょうか。じつはいま、刺身用のカツオマグロをもっとも多く日本に届けている日本の遠洋カツオマグロ漁船が存亡の危機にあります。1年以上におよぶ長い航海を経て日本にカツオやマグロを届けても採算が合わなくなってしまったのです。経費を減らすために血の出るような努力をしていますが、漁にでるだけで赤字になってしまうのです。なぜそうってしまったのでしょうか。これから日本のカツオマグロ漁業はどうなるのでしょうか。その存続にはどんな努力が必要でしょうか。漁業者が必要とする資金の手当を側面から支援しカツオマグロ漁業を見続けている全国遠洋沖合漁業信用基金協会の富岡功理事長に、カツオマグロ漁業の実情とこれからを聞いてみました。(インタビュー・浮須雅樹)



—基金協会は今年で50周年を迎えたそうですね。

**富岡理事長** 11月5日でちょうど50年を迎えました。1954年3月1日、太平洋のマーシャル諸島ビキニ環礁で、静岡県焼津市のマグロ漁船「第五福竜丸」が米国の水爆実験の死の灰を浴び被爆しましたが、その被災に対する漁業振興費補助金の一部を基金とし誕生したのが日本かつお・まぐろ漁業信用基金協会、現在の全国遠洋沖合漁業信用基金協会です。

—半世紀を振り返りいま思うことは。

**富岡理事長** “栄枯盛衰”です。カツオマグロ漁業にとってもその言葉が当てはまると思います。いまは残念ながら枯、衰の時期と言えるでしょう。とくに最近の燃油の高騰はそうした動きを加速させました。たとえば平均的なマグロ漁船の償却前利益が1000万円程度なのに対し、燃油代はこの1年間で2000万円以上増加しています。このため、いまは毎月のように廃業する漁業者がでてい

ます。協会としては苦しい漁業者にもお金が融資され、次の操業ができるよう努力していますが、いまはすべての漁業者を救うことは困難な状況と言えるでしょう。本当はすべての漁業者に残ってもらいたい。しかし現実には違います。すべて無くなってしまわないために、残っていけるようなところをがんばってもらいしかありません。栄枯盛衰を経て、これからは不連続の再生を図る必要があります。

—不連続の再生とは。

**富岡理事長** 戦後から培い、世界に冠たると言われた日本のマグロ漁業ですが、そのシステムがいまの時代に合わなくなってしまっているのかもしれない。いま「構造改革」ということが政府だけでなくいろいろなところで言われていますが、マグロ漁業も「構造改革」をして古いしがらみを断ち切り新しい再生をしないとはいけないう時がきているということです。

—かなり深刻な状況ですが、再生の可能性はあるのですか。

**富岡理事長** 可能性は十分にあります。漁業者にも販売の努力をしている人、省エネ船の建造や省エネ操業などを真剣に考え、取り組んでいる人は大勢います。いま必要なのは、漁業者だけでなく、国、行政、関係者が一体となってどこまで真剣に再生に取り組めるかだと思います。日本人が漁獲したマグロを日本の食卓に届け続けるためには、いま再生への取り組みをしないといけないのです。この厳しい状況を乗り越えるために協会としても無担保・無保証のつなぎ保証制度を実施したり、燃油対策資金の保証や再生ファンドに出資する準備をしています。ただ、これは抜本的な改革を進めていく過程において必要な経過的な措置であり、目標は構造改革をいかに実行するかなのです。

(2面につづく)

## (1面からつづく)

——国はマグロ漁業のために何をすべきでしょうか。

**富岡理事長** いま自給率目標（平成24年度に食用魚介類は65%が目標）が示されていますが、もっと具体的にどうやって自給率を確保するのかその方法論を明示してもらいたいですね。日本はマグロの自給を必要としているのか、どれだけ必要とするかしないかということを確認してもらえれば、取り組むべき方向が自ずと見えてくると思います。

——漁業者に求められているのは何でしょうか。

**富岡理事長** もっとしたたかに生きてほしい。国、行政に頼むことはもちろんあると思いますが、自力でどう生きていくか、より真剣に考える必要があると思います。強い信念

と努力、そして工夫があれば活路は開けると思います。経営のいい漁業者を見ていると、自ら生き抜こうという姿勢がありありと伝わり、そのために何が必要かが明確です。経営者として甘えをぬぐい去り、ありとあらゆる手段を講じて経営の存続を考えてもらいたい。

## 消費者にもっと知ってもらいたい

——消費者に話したいことは。

**富岡理事長** いままで話した実情があることを知ってもらいたい。スーパーで売られているマグロがこうした厳しい状況の中で供給されていることを知ってもらうことが一番重要です。そしてそれを伝えて、少しでも多くの消費者にマグロ資源のこと、マグロ漁業のことに関心を持って知ってもらうことが大切です。

——OPRTに期待することは。

**富岡理事長** 日本人にとってマグロは欠かすことのできない食材であり、日本にとってマグロ漁業は必要です。ただ、マグロ資源は天然であり乱獲すれば無くなってしまいうことを消費者の方は実感としてまだ持っていないと思います。それが現実です。いまのマグロ資源は決していい状況ではありません。だからこそ消費者に未永くマグロを食べ続けるためにはどうすればいいかに少しでも関心をもってもらう活動をOPRTには期待しています。

漁業者の真の構造改革が進み、そして消費者がマグロ資源のこと、マグロ漁業のことに少しでも関心をもってもらうことができれば、次の世代にもカツオマグロの食文化、漁業を渡すことができると思います。

## マグロ関連情報

## ICCAT

台湾に厳しい制裁措置  
蓄養マグロも管理強化

## ■台湾対策

スペイン・セビリアで11月14日から開かれていた大西洋マグロ類保存委員会（ICCAT）年次会合は20日、台湾に対し厳しい制裁措置を課すことを決めた。メバチマグロの過剰漁獲および漁獲海域の付け替えなどの不正行為により、昨年（2005年）の会合で改善要求を受けていた台湾に対し2006年のメバチ操業隻数を今年の98隻から15隻に減らし、残りの船をすべてポジティブリストから外すことで、漁獲枠は1万6500トンから4600トンに削減する。

操業が認められた15隻についても全船オブザーバー乗船、指定港での水揚げ検査、洋上転載禁止などの義務を課し、厳しい監視・取締状態に置かれる。ICCATは台湾に対し、今回の措置を実施したうえ、さらに

IUU漁業の廃絶、過去の不正漁獲の調査・処分、減船隻数の上乗せ、小型マグロ漁船の減船などを求めている。こうした条件が実行されない場合、来年の年次会合で貿易制裁措置を決定することも決めた。

## ■転載も管理強化

今回の会合では漁獲物の転載も規制することを決めた。運搬船についてはすべてICCAT事務局への登録が義務づけられ、港湾での転載については漁船旗国の確認や港湾国への事前、事後通報、さらに公海上での転載は漁船旗国の事前許可制となり、ICCATが派遣するオブザーバーの乗船・監視も義務づけられることになった。

## ■不正蓄養マグロ締め出しへ

さらに蓄養については、蓄養場に搬入する魚を漁獲する漁船をリスト化し、リストに掲載されていない漁船からの搬入を禁止。ICCATに登録された正規の蓄養場以外の蓄養場やサンプリングを行っていない蓄養場からの輸入は禁止されることも決めた。また、不法な蓄養が指摘されていたトルコの過剰漁獲問題は、実態を調査しながら日本と協力し問題解決を図ることになった。

## CCSBT

06年は現状据え置き  
07年以降に漁獲枠削減検討

ミナミマグロ保存委員会が10月11日～15日台湾で開催され、2006年の漁獲枠を2005年レベルに据え置くことで合意された。

近年の資源状況の分析結果を基に科学委員会から勧告された漁獲枠の大幅削減については、各国とも深刻に受け止め、2007年から削減を検討するため明年7月に特別会合を開催することが合意された。また、推定1,400トンを漁獲しているインドネシアについては、生鮮も含め輸入停止が継続されることとなった。

## 2006年ミナミマグロ漁獲枠

|       |                |
|-------|----------------|
| 日本    | 6,065トン(前年並み)  |
| 豪州    | 5,265トン(前年並み)  |
| NZ    | 420トン(前年並み)    |
| 韓国    | 1,140トン(前年並み)  |
| 台湾    | 1,140トン(前年並み)  |
| フィリピン | 50トン(前年並み)     |
| 合計    | 14,080トン(前年並み) |

## 賛助会員情報

会員数 **120** 超

本年8月から広く加入を呼びかけ始めたOPRT賛助会員（法人、個人）は一口会員を中心に、このところ加入者が急増、会員数は、120を超えました。これまで、一般消費者をはじめ、魚市場等流通関係から、運搬船、漁業器材メーカー、資源保存関連団体、マスコミ関連など幅広い分野から加入していただいております。今後、賛助会員のご紹介等のコーナーを設けます。皆様のご意見もお寄せください。

# マグロ資源がなくなる危機を 日本人にも知ってもらいたい

「俺たちのマグロ」 著者

齋藤 健次氏

「スマセイ ベストブック  
11月号」より

“マグロ漁業の伝道師”として、OPRTニュースレター7号でご紹介した齋藤健次さんが、今度は「俺たちのマグロ」(小学館、税別1400円)という本を出版しました。この本は、「スマセイ ベストブック11月号」(発行：住友生命保険)で齋藤さんのインタビュー記事とともに掲載、紹介されています。「俺たちのマグロ」を書いた動機など、齋藤さんの話は、みなさまにもなじみ深いものと思います。スマセイさんのご了承を得て、インタビュー記事全文を転載します。



## マグロ船の上では食べるのが何よりの楽しみ

——マグロ船でコック長をされていましたね。

齋藤氏 もともとフリーライターをしていたのですが、28歳のときに一念発起して、マグロ船に乗り込むために高知に行ったんです。子どものころから、男っぽい魅力にあふれる船乗り憧れていましたが、3度の航海で体験したことは、見るもの聞くもの、すべてが新鮮でした。

——その体験が「まぐろ土佐船」という本になったのですね。

齋藤氏 店のお客さんにマグロ船時代のお話をすると、とても喜ばれるんです。お客さんたちに勧められたこともあります。私自身も、貴重な体験を1人でも多くの人に伝えたいと思うようになり、書きました。船を下りてからも、マグロ船との関係を保っていたかったんですね。

——それが小学館のノンフィクション大賞に選ばれて…。

齋藤氏 もともと自費出版くらいの気持ちだったんです。それが245もの作品の中から大賞に選ばれるなんて、自分でも驚きでした。きっと選考委員の方も、まったく知らない異次元の世界の話だったからだと思います。

——船を下りて、かなりの時間が経ってからの執筆でしたね。

齋藤氏 そうですね。航海の間、献立帳をはじめ、船員たちから聞いた面白い話、気象や現在地などをかなり正確にメモを取っていましたので、それが大切なベースになりました。書き上がるまで10か月ほどかかったでしょうか。

——マグロ船でのことで印象的だったことはなんでしょう。

齋藤氏 ペンギン、冰山、オーロラ…。日本人がこんな地球の果てで働いているんだなあ、と感動しましたね。視野に灰色の空と海しか入らない中で、鳥羽一郎さんの「兄弟船」などを聴いていると、鳥肌が立ちましたよ(笑)。オレは生きている、みんなに旨いものを食わせなくては、と強く心に誓ったものです。

——コック長としてのプライドと信念ですか。

齋藤氏 マグロ船の上では、食べるのがなよりの楽しみで、毎日四食(朝・昼・夕・夜食)、コック長がつくった料理を食べますから責任重大です。限られた食材を使って、おいしくつくるという腕と覚悟が必要なんですよ。

——本書「俺たちのマグロ」を書こうと思われたのは、養殖マグロに疑問を持たれたからだと聞きましたか。

齋藤氏 ここ数年、養殖マグロが

氾濫しています。見た目には立派でも中身は脂だらけ、これが本当にマグロと言えるのか？という疑問を感じました。

——日本人がマグロ資源を食いつぶしているとも…。

齋藤氏 日本人は安ければ喜ぶ傾向があり、不法に捕獲したものが日本の市場に並びます。しかしこのままだと、マグロ資源がなくなってしまう。どうして安いのか？消費者も知る必要があるのではないのでしょうか。

## すべてを食べ尽くせば、マグロも喜んでくれると思う

——マグロの危機を訴える団体もあると聞きました。

齋藤氏 不法に獲ったマグロは「買わない！売らない！食べたくない！」という運動を続けるOPRT(責任あるまぐろ漁業推進機構)の活動を支援しています。

——マグロ料理専門店を出して20年ということですが。

齋藤氏 マグロはどの部分も捨てる場所はないし、それぞれおいしいことを実感していました。例えば「エラ肉」はエラの周りの三日月の部分、「尾の身」は通称“犬殺し”と呼ばれるゼラチンのこぶで、どちらも普通なら捨ててしまう部分ですけど、これが絶品なんです。すべてを食べ尽くすことで、マグロも喜んでくれると思っています。

——今後はどんな本を出版したいとお考えですか。

齋藤氏 マグロ料理のレシピ本を書きたいんです。マグロは高タンパク質で低脂肪、低カロリー。それにDHA(ドコサヘキサエン酸)という脳細胞を活性化させる成分が多いと言われます。ですから、マグロを本当に堪能できるような料理を紹介してみたい。最初に航海記、次に資源問題、そして料理の本と続けばバランスも良いですから。(了)



マグロを食べて元気な家族

## 天然・冷凍・さしみマグロキャンペーン 全国で活発に展開

### 草の根で広がったマグロ資源の大切さ

責任あるまぐろ漁業推進機構（OPRT）の第2回「天然・冷凍・さしみマグロキャンペーン」が11月10日から24日まで、全国の鮮魚小売店で実施され、大いに盛り上がりました。

今回のキャンペーンのキャッチフレーズは、昨年につき「マグロを食べて元気な家族」です。OPRT会員でありキャンペーンに協力していただいている全水商連の藤原厚会長が考案したキャッチフレーズは、昨年も実施店で大好評となり、今回も同じものになりました。年末の繁忙期を避けて1か月早く実施されたキャンペーンですが、都内を中心とする重点協力店など全国約9000店では、OPRTのシールが貼られたマグロが店頭に並び、良質なたんぱく質でDHAなどを大量に含むマグロの優れた特性がパンフレットなどで紹介されました。

東京・等々力の「魚辰」は昨年に



OPRTのこと、ルールを守るマグロ漁業のこと、そしてマグロの優れた特性などを訴えていました。

昼時にマグロを買いに魚辰を訪れた主婦は「OPRT？知らなかった。でも美味しいマグロが食べられなくなると困るし、ルールを守ってもらうのはいいですね」とOPRTの活動に納得した様子でした。

東京魚商の理事長でもあるご主人

続いて今年もキャンペーンに参加しました。店頭ではポスターのほか、手書きで「ルールを守ったマグロを販売しています」と書いた札も掲げながら、店主の大武勇さんは、お客さんに

「いつもと違うシールが貼ってあるので、『これ何？』と聞くお客さんもいる。ルールを守って獲ったマグロの目印ですよ」と、ほとんどのお客さんが納得してくれる。うちは基本的に天然のマグロしか置かないので、資源を守り、ルールを守っていつまでもマグロが食べられるようにOPRTにもがんばってもらいたい。お客さんもきっと同じ気持ちだと思うよ」と話してくれました。

キャンペーンには、全水商連（全国水産物商業協同組合連合会）のほか、全水卸（全国中央市場水産卸協会）、全水卸組連（全国水産物卸組合連合会）、全国消団連（全国消費者団体連絡会）のOPRT会員4団体にご協力をいただきました。ありがとうございました。

### 12月10日三崎でセミナー開催

なお、キャンペーンの一環として、12月10日（土）遠洋まぐろ延縄漁船の基地・三崎港で、魚市場の見学や天然冷凍さしみマグロの食べ比べ等を盛り込んだセミナーを企画しました。参加希望はOPRT人見まで。（定員40人になり次第締め切り）

## 中国刺身マグロ市場開拓が加速

海外漁業協力財団と中国政府のプロジェクト

### 北京に超低温冷蔵庫完成

9月27日は中国のマグロ市場にとって記念すべき日になりそうです。その日、中国の首都・北京に初の超低温冷蔵庫が竣工しました。中国のテレビ、新聞などは北京の超低温冷蔵庫完成をこぞって報道し、中国国民はマイナス60度で凍結され流通する「冷凍刺身マグロ」の存在を強く意識することになりました。2003年11月に海外漁業協力財団と中国政府がスタートした「中国マグロ市場開拓プロジェクト」がいよいよ完成に向けての最終段階に入っています。

完成した超低温冷蔵庫は、プロジェクトの大きなテーマの1つでした。コールドチェーンが未整備の中

冷蔵庫が竣工したその日、日本の海外漁業協力財団と協力してプロジェクトを進めてきた中国漁業局の李健華局長は「このプロジェクトの成果は水産の分野だけにとどまらない。中日関係に大きなプラスになる」と成果を強調しました。海外漁業協力財団の島田理事長も「日本と中国の長い漁業協力の歴史において新たな1ページになる」と歴史的な意義を述べました。

中国にマグロ市場ができることが日本にも中国にも大きな意味があります。日本にとっては、世界で唯一の刺身マグロ市場国状態からの脱却です。「日本以外に市場をつくる」

国にとって、消費地に超低温冷蔵庫ができることはマグロ市場開拓を進めるうえで不可欠なのです。

ことで日本へのマグロの集中を回避することができます。また、急速な経済成長が続く中国にとっても、国民の食への関心の高まりに 대응するとともに、中国の漁業振興という2つの大きなテーマに役立つのです。

いま、中国では徐々にマグロ市場が広がりを見せています。これまで中国に広がっていたCOマグロ（品質が劣化してもわからないように一酸化炭素で処理したマグロ）についても中国政府は規制の準備を進めており、その市場が冷凍マグロに代わる可能性が高まっています。また、北京でも上海でも、ヘルシーな日本食に関心がもたれ始め、刺身も多く食べられるようになってきました。回転寿司も町を歩けば普通に見つかります。

中国の市場開拓はまだ道半ばですが、そのスピードは加速しているようです。

### 編集後記

台湾は、120隻の大型まぐろ延縄漁船のスクラップ計画を発表し、10月中旬までに45隻が高雄港に帰港、スクラップを開始した（その後、ICCATで40隻を追加し、160隻に修正する旨発表）。OPRTは、調査団を派遣し、その状況を調査した。スクラップに要する資金は台湾政府・業界が拠出し、責任ある漁業実践に向け改革に取り組み始めた。しかし、ICCATは厳しい制裁を課した。11月に開催されたICCATでは、アフリカの発展途上国の代表は、過去に自ら受けた制裁に比して、台湾には甘すぎるとの意見もあった。国際社会で一度失われた信用を回復することは容易ではないが、台湾の努力を信じたい。一方、台湾を責めるばかりではいいのだろうか。国際社会は市場国・日本の責任も問うていることを忘れるべきではない。

（原田）